

大沼法龍著

廣大難思乃大慶喜

敬行寺發行



昭和 49 年 8 月 5 日 本堂のガラスに鐘楼が映る

廣

廣

大

難

思

乃

大

慶

喜

稱念之為欣喜

念之稱名乃懺悔



法龍

目次

はしがき

- 1 地獄極楽は死後ではない…………… 五
- 2 贗物が横行している…………… 一三
- 3 実地を通らねば駄目…………… 二五
- 4 調機誘引…………… 三八

本論

- 1 第十八願…………… 七四
- 2 成就文…………… 七八
- 第一節 成就の文…………… 七八
- 第二節 聞其名号…………… 八〇
- 第三節 信心歡喜…………… 八三

第四節 乃至一念……………	八六
第五節 時尅の一念……………	九〇
第六節 至心廻向……………	九五
第七節 即得往生……………	九九
第八節 住不退転……………	一〇六
第九節 唯除五逆誹謗正法……………	一一二
3 方便の願より眞実の願え……………	一一九
第一節 第十九願（方便）……………	一一九
第二節 第二十願（方便）……………	一二五
第三節 第十八願（眞実の願）……………	一三三
第四節 比較して見ましようか……………	一四四
第五節 もう一步進みなさい……………	一五〇
第一項 死後の往生を楽しむのが第二十願……………	一五〇
第二項 廻向が空手形が二十願……………	一五四

	第三項 慶べないのが二十願	一五八
	第四項 真仮の水際の立たないのが二十願	一六五
	第五項 実機の見えないのが第二十願	一七〇
	第六項 難信の法を知らないのが第二十願	一七六
4	胎生・化土往生	一八二
5	蓮華化生・報土往生	一八八
6	付属の文	一九一
7	聞き方が間違っている	一九八
8	救われた体験がない	二〇五
9	これからが本当の求道	二一五
10	三願転入	二三三
11	親鸞聖人	二四二
12	大石家老	二五〇

13	乃木將軍	二五六
14	非俗非僧	二六三
15	昭和の法論	二六九
	第一節 史上の三大論争	二六九
	第二節 真宗では求道しなくてよいのか	二七二
	第三節 比較して見せましょうか	二八八
	第四節 駄目押し	二九五
	第五節 くどいでしょう・老婆心ですよ	三〇七
16	おわりのことば	三一六
	後援会員名簿	三二二
	全集目録	三二五

はしがき

1 地獄極楽は死後ではない

B^ビ29が撃墜^{げきつい}されたとき、三世^{せい}が搭乗^{とうじょう}していた。軍法会議^{ぐんぽうかいぎ}で「貴様^{きさま}は、祖国^{そこく}に弓^{ゆみ}を引くとは何事^{なにごと}か」「早く降伏^{こうふく}して頂^{いた}きたかったからです」「馬鹿^{ばか}！ 日本^{にっぽん}が降伏^{こうふく}すると思^{おも}っているか」「大和魂^{やまとたましい}だけでは、戦勝^{せんしょう}することはできません。物資^{ぶつし}に天地^{てんち}の相違^{さうい}があります。このままで進め^{すす}ば、村落^{そんらく}に至^{いた}るまで灰^{はい}になるでしょう。早く降伏^{こうふく}して再起^{さいき}しなければ、世界^{せかい}の水準^{すいじゆん}より遅^{おく}れるでしょう。これを聞^きいて係官^{かかりかん}が啞然^{あぜん}としたそうですが、大沼^{おおぬま}の奴^{やつ}、大学院^{だいがくいん}の三年間^{ねんかん}は本願寺^{ほんがんじ}の恩顧^{おんこ}を蒙^{こうむ}り卒業^{そつぎょう}さしていた大きながら、反旗^{はんき}を翻^{ひるがえ}すとは何事^{なにごと}ぞと当局^{とうじきょく}は眼尻^{めじり}を逆立^{さかだ}てておられるが、このままで真宗^{しんしゅう}が進^{すす}

めば骨抜きになり、低級な宗教よりも墮落するでしょう。やたらに他力不思議、他力廻向の掛け声を吹きまくっているけれども、奮起する機受の信相がぬけていては、觀念の遊戯にすぎない。たとえ法は万善万行恒沙の功德を納めている最高無上の妙法であつても、死後を眺めて有り難がつている宗教であつては、絵に書いた餅を眺めているにすぎない。学問をならべて悦に入つても、それは机上の空論にすぎない。廻向が届いたのなら至徳具足の益で、この世の生活が大満足でなければ届いたとはいえない、転悪成善の益で日ごろの害心が感謝法悦に変わらなければ、救済されたのではない。死後を楽しんでいるのは、平生業成が抜けているのだから、浄土真宗ではない。煩惱があるから慶べないという逃げ口上は、仏智が満入していない証拠である。物質の多寡ではない、精神の持ち方だ、この人世が最上無上の境界に変わらなければ、宗教の必要はない。

法の尊高を仰いでいるのは第二十願の方便の桁にすぎない、機受の信相が明瞭に諦

とく
得できたときが、第十八願の眞実の世界である。親が「大丈夫」と宣伝しても、子が行者正受金剛心にならなければ、絶対に救われていない。地獄極楽は死後だけにあるのではない、現在の延長が未来だから、現在が摂取されていない者が、死んだらお助けとは矛盾も甚しい。当て字に書いてみせましょうか。地獄とは自業苦、自分の身口意の動作が毎日毎時結果を引いているのです。天変地変、悪事災難、不幸心配、懊惱苦惱、間なく噴き出ているから無間自業苦である。それが転換できないようなら、宗教は必要ではない。諦めるとは、明らかに見る、蒔いた種しか生えてこないと知るのだ。一諸の悪を作すことなかれ、衆の善を奉行せよ、自らその意を淨することが、是諸仏の教なり」といわれてあるが、身心ともに猛毒を吐きながら幸福を願える柄でないことを知れ、心の転換に徹すれば、業苦が楽になるのだ、それを業苦楽というのだ。ありがたい話を聞いてありがたいがっているのは、第二十願の方便の術にいたのであって、その話を通してありがたい身になったのが、第十八願の眞実の行者である。

贖物にせものから本物ほんものになるのだ、真似まねから真実しんじつに帰きするのだ、方便ほうべんから真実しんじつに転入てんにゅうするのだ、合点がってんから体験たいけんに進すすむのだ。「歎異鈔たんにしやう」の終わりおに「おほよそ聖教しやうきやうには真実しんじつ権けんけ返へともにあひまじはりさふらうなり、権けんをすて実じつをとり、仮けをさしおきて真しんをもちひるこそ、聖人しやうてんの御本意ごほんいにてさふらへ」とあるが、真宗しんしゆうでは念仏ねんぶつに向むかつておれば、みな本願ほんがん他力たりにきの称名しやうみやうと思おもっているけれども、それが大間違おおまちがいである。

諸善万行しよぜんまんぎやうを修しゆするより易やすいから、称名しやうみやうせよという、修しゆし易やすいから称となえる万行まんぎやう随一ずいいつの念仏ねんぶつと見るのが第十九願がんの桁けたにいる念仏ねんぶつであり、諸善しよぜんを修しゆすることのできないものが念仏ねんぶつで救すくわれるとすれば、諸善万行しよぜんまんぎやうより念仏ねんぶつ一行ぎやうは勝すぐれていると見るのが、万行超過まんぎやうちやうかの念仏ねんぶつとみる第二十願がんの桁けたにいる念仏ねんぶつである。この二願がんの桁けたにいる念仏ねんぶつは、称功しやうこうを慕つる自力じりきの機執くつきがあるから、そこを突破とっぱしなければ機執きしゆつは淨尽とれないから、他力たりにき不思議しぎの境地きやうちには進すすまれない。他力たりにきの名号みやうごうに眼めをつけたのを他力たりにき不思議しぎと自惚うめぼれているのだから、その域いきを超ちやうえつすることが難中なんちゆうの難なんである。始めはじから真しんなるものは一人ひとりもない、

みな方便を握つて真実と思つてゐるだけである。法の尊さを眺めてゐるだけで、機の醜さを知らない。機といへば、三毒の煩惱しか知らない、十劫の昔に助かつてゐる話だけを聞いてゐるので、逆謗の実機を知らない、信念冥合の平生業成を知らない、凡智がつきて仏智に生かされることを知らない、唯除逆謗と捨てられた絶対の実機を知らない、若不生者に生かされた絶対他力の実法を知らない、凡智がつきて仏智に生かされた不思議の境地を知らない。それは二種深心の真似をしてゐるだけで、徹底してはいない、それは仏智を眺めてゐるだけで、満入してゐないから水際は立たない。水際は立たないのは方便の桁をうろつてゐるからであつて、真実に仏凡一体、機法一体になつたのなら、真仮の分際は鮮やかに諦得できてゐるはずである。方便の桁にゐる間は真実の世界を知らないから、真仮の分際が説けないのである。

聖人は「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」と仰せられてあるが本当だ。

真宗で真仮の分際、信前信後の水際を説く人が一人もないのは、名号を眺めてい
 るだけで、諦得していないから説けないのだ。法の尊さを眺めて死後の往生を樂しん
 でいるのだから、方便の第二十願の桁である。二種深心が徹底し、仏智が満入し、名
 号と一体になって溢れてでてくる念仏を自然法爾の念仏といい、信海流出の称名とい
 うのが第十八願の乃至十念の念仏である。

聖人の特徴は沢山あるけれども、真仮の分際を明瞭にされたのが特徴のなかの特徴
 である。『化土卷』に「竊に以れば聖道の諸教は行証久しく廢れ、浄土の真宗は証道
 今旺なり、然るに諸寺の釈門教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷ふ
 て邪正の道路を弁ふることなし」と大胆な批判であるが、いま聖人がご在世であつ
 たら、この文句は門内の誰に向けられるお言葉でしょうか。信仰の煩悶もなく求道も
 なく、素直に合点し、知った学問、覚えた智慧を信仰のように思い、死後を樂しんで
 おられるお歴々に警告を与えておられるお言葉になりはしないでしょうか。

また「悲しい哉、垢障の凡愚、無際より已來、助正問雜し、定散心雜が故に出離其期なし、自ら流転輪廻を度るに微塵劫を超過すれども仏の願力には歸し難く大信海には入り難し、誠に傷嗟すべし、深く悲歎すべし。凡そ大小聖人一切の善人、本願の嘉号をもって己が善根とするが故に信を生ずること能はず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能はざるが故に報土に入ることなきなり」と悲歎しておられますが、真宗の道俗に対する批判ではありませんか。素直に名号に向いておられるものが助かるように自惚れているのは、悪人正機の本願を無視しているのではないのか。いつまでも他力のお言葉に酔うて、実地の求道を忘れていたのではないか。法体成就の機法一体に眼が眩んで、信念冥合の機法一体がお留守になっているのではないか。機を見るのを恐れて蓋をしているために、二種深心が真似に終わって仏智が満入した大慶喜を知らないのではないか。觀念の遊戯、机上の空論、真似や合点上上りをしていくから、微塵劫を超過すれども仏の願力には歸し難く大信海には入り難いの

ではないか、自分の欠点がわからないから晴れてはいないのではないか。

方便を方便と知らないのは、真実の世界を知らない証拠なのだ。浄土真宗の流れを汲みながら空しく流転したならば、聖人を慟哭せしむるではないか。そのままが十劫已来立たした甲斐もなく、八千遍のご苦勞も空しく素歸りをさすではないか。宿善任せとはいいながら、なぜ自分の実機が見えないのだろうか、法が機に生き、機が法に生きた体験がなければ、撰取されてはいないのだ。老いの涙をぬぐいながら真仮の分際を書かしていただく、迷いを迷いと知らしていただいたものが、心眼を開かしてもらうのだ、自力を自力と知らしてもらったものが、他力不思議を諦得さしてもらうのだ、疑いを疑いと気づかしてもらったものが、疑いなく晴れた天地に出していただくのだ。

「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」とは本当だ。法竜は地上における最大幸福者だ、これから真仮の分際を説かしていただく。この書物が最後まで

ろう、道俗ひとびとに贈おくる形見かたみとなるだろう。これが出世しゅつせ本懐ほんかいの書物しょもつだ、毫碌もうろくもせずによく書かしていただいた、勿体もったいないことだ、南無阿彌陀仏なむあみだぶつ、南無阿彌陀仏なむあみだぶつ。

2 贗物にせものが横行おうこうしている

真仮ほんものの分際にせものを明瞭あきらかに説とき、信前しんぜん信後しんごの水際みずぎわを語かたって、方便ほうべんから真実しんじつに誘導ゆうどうし、贗物にせものから本物ほんものに、真似まねから本當ほんとうの信仰しんじょうに進出しんしゅつさすのが僧侶そうりよの道案内みちあんないをする役目やくめであるから、わたしは入寺にゅうじしてから脇目わきめを振ふらずに真劍しんけんに布教ふきょうしていた。ありがたい法ほうを説とくのは葉くすりの効能書こうのうがきであり、観念かんねんの遊戯ゆうぎ、学問がくもんの戲論ぎろんにすぎない、久遠くおん劫ぢやくから流転るてんをつづけている実機じつぎ、心の秘密こころひみつの部屋へやに頑張がんばっている古狸ふるたぬきを追い出して射止いとしめていただいでこそ、救すくわれたといえるのだ、実地じちの求道きゅうどうをさしていただくことが難中なんちゆうの難なんであると実地じちの求道きゅうどうを勧めすすめると、いままで素直すなおに聞きいていると自惚うぬぼれていた水面すいめんに石いしを投げ込んだのだから、わたしも信仰しんじょうが崩くずれた。私も信仰しんじょうが変へんになったと信仰しんじょうの動搖どうようを始はじめた

ので、管事から父に宛て注意の手紙がきた。(第十一集『本派本願寺の危機』、どちらが異安心か)に詳説してある。)「お前は信前とか信後とか詳しく説いているが、十八願の信後の話をしておけば自分も楽でよし、同行も煩悶をせんでよし、同行が真剣に集まれば、僧侶は門徒を取られるように思つて嫉妬するから、頂いた信が誠ならで説教すればよいではないか」「お父さん、信前の人が多いですか、信後の人が多いですか」「信後の人は雨夜の星よう」「それなら信後の真似をささずに、ここが雑行、ここが雑修、ここが自力の心、ここを疑いというのだ、と道案内をして願海に帰入さすのが、僧侶の使命ではないでしようか」「それをする者がいないのよう」「いないから、私がしたらよいでしよう」「僧侶から嫌われて村八分になり、遂に本山から破門されるようになるぞ」「真実を説いて破門されるのなら、目出度いことではありませんか。法衣を剝奪され、本願寺から追放されても、レットルは剝がれても、中味が変わらねばよいではありませんか。法然上人も師匠の叡空上人から破門され、聖人も

叡山から破門されてあるではありませんか。百姓の小伴が大学者たちを向こうにまわして、学問と実地の体験との大論戦をするのは愉快ではありませんか」「お前は腹が据っているのう。うちの寺はどうなってもよいから、真実を説け」と言われたから、今日まで不断の努力をさして頂いているのだ。

現在流布している浄土真宗は、浄土真宗に似せている浄土仮宗である。なぜかといえば、第十八願は王本願だから、方便の願を説くのは間違ひである。法の尊高を仰いでおればよいと、十方衆生を第十八願の一法で救われるように指導しているけれども、その教化の方法は誤っていると思う。誰も彼もみな正定聚の機なら、教化する必要はない。始めから本物はいないのだ、方便から真実に誘導しなければならぬのに、それができないのは、教化する本人が実地に求道したことがなく、真仮の分際を知らないのです。真宗は絶対他力の第十八願の一本でよいと言ひ出したのは誰だ、言ひ出した張本人は誰か、大きな罪惡を侵していることを反省しなければならぬ。そ

れに右にならえで附和雷同して、法の尊さを眺めて有り難がっているのを他力廻向の信仰のように心得ているのは話を聞いているだけで、機受の信相が抜けているから撰取されてはいないのだ。

第十八願を素直に聞けといっているが、第十八願を聞くのではない、第十七願の諸仏の讚嘆しておられる名号を聞かしていただくのだから、『大経』下巻に第十七願と第十八願の成就文を説いて「十方恒沙の諸仏如来皆共に無量寿仏の威神功德不可思議なることを讚歎したまふ、諸有衆生がその名号を聞いて信心歡喜し乃至一念せん至心に廻向したまへり、彼国に生ぜんと願する者は即ち往生を得て不退転に住せん、唯五逆と正法を誹謗した者は除く」と書いてあるのを読んで覚えて、自分は素直に聞いたと自惚れて、他力廻向だから易いと合点したのを他力至極の金剛心だと自分免許で、第十八願の一本でよいと布教しているのだが、それは法を眺めているだけだから易いのだ。唯除逆謗と除かれているのが自分であるとは全然気がつかないのだから、

聞即信の一念と同時に心の往生を得て不退転に住した大慶喜はないのだ。素直に話を聞いて聞いているだけだ。成功美談を聞かされて感激したのを、自分が成功したのだと誤信しているのと同様だ。

同じ第十八願の成就文を聞かされても、話を聞いて合点してそこに腰を掛けている人と、どうしても安心ができない、と実地に求道して、大満足をした人とができてきますよ。その聞損の機が第二十願、第十九願に桁を落としているということを知らないで、みな十八願の機類と十把一束にしているのは、真仮の分際を知らないのではないでしようか。

浄土真宗の教化の方法も、悪いとはいえない。大衆は後生が苦になつてはいない、信仰の煩悶をしてはいないのだから、物見遊山的に団体旅行のように大騒ぎをするのもよいが、それが全部と思つたら大間違いだ。宗教の本義を忘れてはいないか、拔苦与樂の根本義を忘れてはいないか、今生死の苦海に溺れている人を救済することを忘

れてはいないか。この機が救われなければ満足はできないのだ、この機に仏智が満入しなれば大安心はできないのだ、法を眺めておれる間は素直に聞けるのだ、薬の効能書を聞いている間は病気は軽いのだ、御馳走の講釈を聞いている間は飢えてはいないのだ。机上の空論や観念の遊戯がしておれる間は、信罪福の心や自心建立の心で落ち着いておれるのだ。逆謗の屍が頭われ、心の秘密の部屋から古狸が眼を光らせてきたら、ありがたい感情の信仰は吹き飛んでしまうのだ。

素直に聞け、素直に聞こうとしている間は信仰も遊戯だ。三千世界を探しても、素直なものも一人もいません。その機がネコをかぶって聞き難い法を素直に聞かしていただいた、遇い難い法に遇わしていただいたと涙をながして自惚れていたが、ただ話を聞いていただけで、何にも聞いていなかったことに呆れる境地がでてくるのだ。そこを通らなければ、真劍の求道にはならないのだ、そこを通らなければ三定死の機は見えて来ないのだ、そこを通らなければ難中の難とはいえないのだ、そこを通らなけ

れば自力の機執は除かれないのだ、そこを突破しなければ疑いなく摂取されたという自信はないのだ、そこを突破しなければ真仮の水際、信前信後の鮮やかな境地は説けないのだ。

第十八願だけでよい、方便を説く必要はないと言っている人の欠点を挙げてみましようか。

(一) 法蔵菩薩の四十八願のうち、摂生の本願は三つあります。第十八願は他力のほかの他力、この絶対他力が親さまの随自意の本願でありますけれども、凡夫の自力の機執が一朝一夕では捨たらないから、第十九願は自力のなかの自力、第二十願は他力のなかの自力、この根機を調整して絶対他力に誘導するのです。これを従仮入真というのだけれども、自分は宿善が厚いから、初めから絶対他力に帰入していると自惚れているのは、観念の遊戯をしているだけだ。この定規によらないで、十八願の一本で布教すればよいと思っっているものは、彌陀の願意を無視しているのだから、絶対に報

ど 土往生はしてはいません。

(二) この三願を如実に説かれたのが、釈尊の三部経であります。第十九願開説の『観経』で定散二善と念仏とを比較して説き、第二十願開説の『小経』で念仏の超勝を説き、第十八願開説の『大経』で絶対他力の救済が教えてあるのは、定散諸機各別の自力心から如来利他の信心に通入せしめんがためであるけれども、方便を方便と教えないから、合点したのを真実と誤信しているのであって、方便と真実との分別を明瞭にし切らないのは、釈尊の教意に悖っているのである。

(三) 聖人は三三の法門を説いて真仮の分際を明らかにして、自ら三願を転入して妙果を得ておられるのに、誰一人としてその教えを踏襲して説く人のいないのは、聖人の衣鉢を継いでいる人がいないのだ。真意を得た人が一人もいないから、真仮の分際を説くのが特徴のなかの特徴であるのに説き切らない、ということは、真意を得ていないのではないか。初めから真実な者はいない、真似から本物になるのです。真似を

真似と知らないのは贖物ではありませんか、果遂の誓いの真意を知らない、程度の低い信仰ではありませんか、真仮を説き切らないのは聖人のお弟子ではありませんよ。

(四) 蓮師は第十九願を雑行、第二十願を雑修、ともに自力の機執が淨尽していませんから自力の心といわれ、この境地は晴れていないから疑いというのですが、何にも知らないで、任せたつもりで向こうを眺めて有り難がっているのは第二十願の法頓根漸の桁であって、他力ではなくて無力ではありませんか、上人の真意を知らない贖物ではありませんか。

聖人が「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」といわれてあるが、真仮を語る人が一人もいない、みな信後の真似をして法を眺めているだけで、実地の体験を語る人がいない。撰取されていないから、語れないのではありませんか。誰でも真実じゃ、真実じゃと思っっているのです。贖物とは思っていないのですが、方便と知らない人は真実に入っはいません。真実に入っった人なら、方便の贖物を語

つて方便より真実へ、調機誘引、從仮入真せしめずにはいられないはずです。ただ第十八願のみを語っている人は、話をしているだけで体験ではありません。実地の体験でなければ、他力廻向の名号を信受してはいけません。信受していなければ、死んだらお助け、死んだらお助け、と死後を眺めているから、平生業成を無視しているではありませんか。

それでは二尊二師の真意に契わないのです。自分は二尊二師の真意を素直に聞いたと悦び入っているけれども、それはありがたい文句に調子を合わして酔っているだけです。それを観念の遊戯、机上の空論というので、絵に書いた餅を眺めているだけだから満腹はしません、血とも肉ともならないから、生活のうえの活動にはなりません。この世はどうもなりません、死んだらお助けと逃げています。現在の延長が未来です、いま撰取されていない者が死後の往生とは、夢を見ている大馬鹿者です。法の尊さを仰いでいるのは、第二十願の方便の術です、他力のなかの自力です。第

十八願が他力のなかの他力で、真実の桁です。どうして他力不思議の桁に転入さしていただくのか、果遂させられるのか、実地の求道をしていないから、教える人も導かれる人も知らないのです。他力の名号を眺めておれば、みな他力と思つていて、です。実地に開発しなければ、他力不思議ではありません。どんな心が自力の心か知らないで、十劫のむかしに成就した法を眺めておれというのは、法体成就の機法一体で、それは話を聞いて感じただけです、それを二十願というのです。信受したのが信念冥合の機法一体で、その体験ができたときに摂取されたのです。そのときが、第十八願に転じたときなのです。

自分は素直に聞かしていただいたと思つてゐるのが自力の心です。ネコをかぶつてゐると思わなければいけれども、みな自力です。教える人も聞く人も、浄土門には自力はないと思つてゐるのです。どう聞いたらわかるか、どうなったのが他力かとあせてゐるのが、みな自力です。たとい火のなかでも分け行きて聞こうとする心も自力、何

とかならんかと気になる心が自力、信樂開發して、地上における最第一の果報者になるまでは、みな自力が引っ張ってくれるのです。

他力廻向、他力廻向と聞きつつ自力の心が動いている間は、みな自力廻向と知らないでやっているのです。どうもならん、何とかならんか、ひよっと墮ちはせぬかと、自分の心を見て不安になる間は、みな疑いです。それを突破さしていただくことが、難中の難です。

いくら法を眺めてありがたがっていても、次のような心のある人はみな二十願の柵をうろついている人で、絶対他力の第十八願の境地に到達した人ではありません。

- 1 難中の難を突破した信仰の煩悶をしていない人。
- 2 天地の転倒するほどの大慶喜のない人。
- 3 血を吐く思いの懺悔のなかった人。
- 4 真仮、信前信後の水際のたたない人。

5 一念の信で日本晴れのしていない人。

6 自分の機を見せていたたくのを異安心と思つてゐる人。

7 喜べないのを自性と思つてゐる人。

8 この人世が最第一の幸福の世界と思えない人。

9 順縁逆縁みな仏法と思えない人。

10 死んでから助かると思つてゐる人。

こんな心のある人は、第十八願の行者ではありません。第十八願の真似をしていただけです。素直な真似をして喜んでゐる贗物ですから御用心ご用心。その心を転悪成善さしていただくのが、果遂の誓いの第二十願の願功です。もう一山越せば広い天地、自由の境地、第十八願の世界があるのです。

3 実地を通らねば駄目

もう一度くりかえして贖物の皮を剥いでおきましよう。第十九願は修諸功德を至心に發願する自力のなかの自力、釈尊がこれを『觀經』に開説して定散二善とし、開いて六度万行、開いて八万四千の法門となる。六度とは、生死の苦海を楽に渡す道が六本あるということ、どの項目でも実行すれば人世は楽らかに生活ができる。

布施―親切、持戒―謹慎、忍辱―忍耐、精進―努力、禪定―反省、智慧―修養、これを二項目に縮むれば、禪定が定善であり、他の五項目が散善である。いざ実行となれば、成就することは吾々の及ぶところでない。『觀經』で阿難が「この經の名前を何と付けたらよいですか」と尋ねたとき、釈尊は「無量寿仏を觀するの經、極樂国土、觀世音大勢至を觀するの經と名前を付けよ」と教えながら、「もし念仏する人がいたならば、これは人中の芬陀利華だから、汝この語を持って、この語を持つとは無量寿仏のみ名を持って」と、名号を付屬しておられるが、自力の善根のなかで自力の称名を教えるので、この称名は他の善根を修するより易いから勧められたので、こ

れを万行随一の念仏といふのです。

第二十願に植諸徳本を至心に廻向するのが他力のなかの自力で、釈尊がこれを『小経』に開説して、「不可以少善根福徳因縁得生彼国」と諸善万行を嫌貶して多善根多福徳の名号を開示して、これを十方衆生に至心に廻向してください。さてあるけれども、誰に廻向してあるか、他力廻向他力廻向と掛け声だけは激しいけれども、廻向してもらう相手は誰ですか、第六意識ですか末那識ですか、それとも阿頼耶識ですか、名号の相手は誰ですか、それとも定機に届けるのですか、散機に廻向するのですか、善機が救われるのですか、それとも悪機が仏さまの狙いですか。至心に廻向する相手が出てなくて、真宗では素直に聞け、素直に聞けといわれていますが、素直に聞ける人間なら善機ですが、真宗は善人正機ですか。それとも強慾我慢心に廻向してください。それですか、瞋恚の焰に名号を届けてください。それとも愚痴の煩惱に徳本を与えてくださるのですか。対機はちよつとも出さずに、廻向法じゃ廻向法じゃと尊

高を讀たいていますが、当局とうきよくに質問しつもんいたします、この教おえ方かたは第二十願がんの方便ほうべんの桁けたであつて、第十八願だいいちの教化きやうけの方法ほうほうではないと思おもいますが、これが真宗しんしゅうの正ただしい第十八願だいいちの教化きやうけの方法ほうほうですか。

ありがたい話はなしを聞きかしているのを、第十八願だいいちの教化きやうけのように思おもつていたら大間違おほまちがいですよ。廻え向こうするぞ廻え向こうするぞと空手形からてがたばかり乱発らんぱつしているが、真宗しんしゅうの同行どうぎやうは何なにを貫もらつてゐるか機受きじゆの信相しんそうはさっぱりわからず、実機じつきを見るものは一人ひとりもなく、ただ感情かんじやうがありがた涙なみだをながせば、これもご廻え向こうご廻え向こうといつてゐるのが、自力じりきえ廻え向こうではありませんか。知らず知らずの間あいだに称名しょうみやうが出来るようになったのがご廻え向こうだと思おもつて、あなたあなたが仏さまほとけに廻え向こうしているのが自力じりきえ廻え向こうですよ、自分じぶんが喜びよろこびを廻え向こうして助たすかつたような氣きになつてゐるのが自力じりきえ廻え向こうということを、自分じぶんが知らないのですよ。みんなこの桁けた、この位置いちに停滯ていたいして法ほうを眺ながめて、死し後ごを楽たのしんでゐる程度ていどの信しん仰とうで、他力たりにえ廻え向こうに似にせて落おち着ついてゐる贖物にせものの信しん仰とうですよ。法ほうを眺ながめて有あり難がたがつてゐるのが第二十願だいいち願がん

で、法が機に生き機が法に生きた機法一体、仏凡一体になったときが第十八願の域に到達したのですよ。

第十八願の相手の機が出ていないで、番頭が表に出て信仰の世話を焼いているのですから、何年経っても信仰は徹底しないのです。説教を聞く時は、サルのがんじょうが表に出て泣いたり笑ったりして法を弄んでいるが、家に帰ると特牛牛が頭を上げるから喜びは消えるのです。求道する態度が、罪は恐ろしいから出るなよ、と悪い心を包んで、善い心を表に出した心で名号を受け取ろうとしている。これを、信罪福の心をもって本願力を願求するというのですが、信仰を求める人がみな、誰でも誰ひとり残らずこの心を通らなければ真剣にならないのですが、いつまでもそこに停滞しては開発まで進まれませんよ。みな自力を自力と知らないで名号を受け取ろうとしているのです。だから、ありがたい時にはお浄土に参れそうなの、悪い心がれば地獄に墮ちそうなの、若存若亡の信仰を繰り返している間に、調熟の光明で照らされて心が調整さ

れて、心の本尊が見えてくるのです。

この桁にいて、もはや自分は信仰が徹底したと自惚れているのが第二十願の桁で、いつとはなしに攝取されたように思っているから、信前信後の水際も立たねば真仮の分際もわからないのです。調熟の光明の桁にいますから、一念の信は凡夫にはわからないというのです。これを育てあげるのを果遂の誓いといい、第二十願の願功とあります。この桁にいては法を眺めているだけです。大慶喜もなければ大懺悔もありません、水際も立たねば難中の難もありません、これからが第十八願に前進するのです。

彌陀の名号は願行具足、機法一体に十劫のむかしに成就して廻向して下さることを悦べと教えていますが、誰が受け取りましたか、話を聞いているだけではありません。それでは法体成就の機法一体の薬の効能書を素直に聞いているだけで、助かってはいません。自分の心の病気を教えてくれずに、機を見るな機を見るな、機を見れば

千年経つても夜は明けないと病気をひた隠しに隠して、全快した風をしている贖物ですから、慶びはちつとも出ません。

「南無阿彌陀仏をとなふればこの世の利益きわもなし」といわれてあるけれども、

五濁悪世の有情の

選択本願信すれば

不可称不可説不可思議の

功德は行者の身に満てり。

といわれてあるけれども、信仰が合点しただけの贖物だから「苦毒は行者の身に満てり」で、業が噴き出るのがよく見えるばかりで、感謝の生活がちよつともできない。凡夫は煩惱があるから慶べるものではないと、『歎異鈔』の九節を冠せて誤魔化しているが、あのお言葉は信後の懺悔であるのに、あなたたちは信前の不安の境地にいて隠れ蓑にしている大間違いですよ。私に言わしたら、摂取されていないから慶べないのです。

罪障功德の体となる

氷と水のごとくにて

水おほきに水おほし 障り多きに徳おほし。

金剛の真心を獲得すれば現生に十種の益を獲る、第七番目に心多歡喜の益が説いてあるではないか。喜びの出ない人を化土巻に、

「真に知んぬ、専修にして雑心なる者は大慶喜心を得ず」と仰せられてあるが、二十願の桁にいる人は名号を眺めて有り難がつているけれども、機を見れば不安であるから大慶喜がないと言っておられますよ。それで真宗では、機を見るな機を見るな、機を見るものは異安心だと威して法に向かしているのですが、鏡に向いたら何が見えるのです。鏡に向け、姿を見るなといえ、馬鹿の骨頂ではありませんか。それが真宗の正意の安心だから、驚く他はないよ。何年法の真実を聞かされても、機の真実が出てこないのだから、一体になる時期は微塵劫を超過しても仏の願力には歸し難く大海には入り難しですよ、十八願の相手は素直な柄ではありませんよ。

第十八願に「至心信樂欲生我國乃至十念」と他力のなかの他力を述べ、方便の二願

には法を先に出して機が後に出してあるのに、第十八願では機が先に出て法が後に出ています。

これを釈尊が『大経』に開説しておられるが、相手の機は素直な柄ではありませんよ、一本綱で追える柄ではありませんよ、真宗では法のお手元だけ教えているが、なぜ自惚れ強い機の手元を叩いて教えないのだ。親さまを五兆の願行を成就して十劫已来立たしても、ウンともスンともいわぬ実機がいることに気がつかないのか、釈尊に八千遍の御苦労をかけても、気の毒なとも思わぬ強情我慢の劣機が自分であることに気がつかないのか、恒沙の諸仏に舌切り仏になってもよいと証明さしても、まだひよつと墮ちはせぬかと危ぶむ横着者が、心の秘密の部屋に頑張っていることがわからないのか、法の丈夫なことをあれほど聞かされても、急ぎもせぬが、あわてもせぬ逆傍の屍が自分であることに気がつかず、私は宿善が厚いから聞き難い法を聞かしていただいた、遇い難い法に遇わせていただいたと有頂天になっているが、一度ぐらい寝

食しょくを忘わすれて求きつ道どうしたことがあるのか、聖しょう人にんのお言ことば葉はを覚おぼえてオーム返かえしに「聞きき難がたい、遇あい難がたい」と言いっているだけではなにか。そんなものに、角かどめ目めも水みづ際ぎわもわかつてたまるものかい、そんな人ひとが九ふ分ぶ九りん厘でで、真しん剣けんな求きつ道どう者しやは一分ぶ一りん厘でもないのだ。宿しゆく善ぜんまかせとはいいいながら、法ほうを浴あびるほど聞きかされても実じつ機きが出でてこないほど、秘ひ密みつの部へ屋やに古ふる狸だめきは隠かくれているのだ。

第だい十八じゅうはち願がんの相あ手ての機きは、素す直なおな柄がらではありませぬよ。唯ゆい除じよ五ご逆ぎやく誹ひ謗ぼう正しやう法ぽうと除のぞかれたのが自じ分ぶんの実じつ機き、久く遠おん劫ごうから流る転てんしている本ほん性しやうがあなたの実じつ機きですよ。除のぞかれておりながら、自じ分ぶんは素す直なおに聞きいていると自う惚ぼれているのだから、箸はしにも棒ぼうにも掛かからぬ代しろ物ものだ。

五ご逆ぎやくは阿あ闍じやく世せ、謗ほう法ぽうは提だい婆ばとむかし話はなしを聞きいて、自じ分ぶんが阿あ闍じやく世せと提だい婆ばを捏こねあげた劣れつ機きと知しらないのだから、十八じゅうはち願がんを素す通とおりしているのも無む理りはない。その機きが知しらされることが難なん中ちゆうの難なんであり、開かい発はつすることが極ごく難なんの信しんですよ。

至心信樂己を忘れて素直に聞いていると思われれるのは自惚れですよ、実機とは無関係で、お経の文句を読んで通っているだけです。

いま現に三定死の境地に立たされて、火を噴いて狂うている逆謗の屍が自分であつたと照らし出された劣機が、必墮無間と投げ込まれた実感のあつたものが、われ能く汝を護らんの勅命一つに生かされたとき、至心信樂己を忘れて大慶喜をし大懺悔をするのであつて、机上の空論や観念の遊戯とは同日の論でない、天淵の差のあることを知らねばならない。

泥棒を捕えてみればわが子なり、逆謗を押えてみればわが機なり、素直に聞いているのは話を聞いていただけで、実地につきの世界に出て行くとなれば、心の奥底から化け物の本性が頭を挙げてきますよ、無明業障の黒煙のなかから青鬼、赤鬼、斑鬼、鬼も大蛇も無間のどん底から噴き上げてきますよ、悪人正機の実機が姿を現わしてきますよ。金輪際素直にない手筈に合わない難化の三機、難治の三病が見えてきま

すよ。煩惱具足だと話に聞いておれる間は素直に聞いていたが、五逆も、謗法も、闍提も、邪見も、憍慢も、弊も、懈怠も、十八願から洩れたガラクタの代物が続々と噴き出たときには、三千世界のものはみな助かつて、私ひとりには助からないのだと往生の望みが絶えた時が捨自、五兆の願行は私一人のためであったと飛び上がったとき、三千世界のものはみな墮ちても、私が助からなかったら親が泣くとなったときが帰他、聖人は「五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人がためなりけり」、法竜は十方法界わが物なり、萬歳萬歳萬々歳、天に踊り地に踊り大慶喜すると同時に、頭を疊に叩きつけて、よくも大地が裂けなかつたこと、よくも口が裂けなかつたこと、この悪魔が無上正覚を得るとは不思議のなかの摩訶不思議、三品の懺悔とはこのことか、全身から血汐が逆流する大懺悔、よーし聖人さま、ご安心くださいませ、息の通う間、真仮の分際を説いて二尊の願意教意、聖人の真意を發揮させていただきます、と誓うて今日に及んでいるのだ。

法体成就の機法一体を眺めてありがたがっている間は第二十願の方便の術で、十劫秘事の異安心の親玉である。調熟の光明に照らし出された逆謗の屍が十八願の相手の機です。姿が見えないのは、鏡が曇っているからだ、真実の機が見えないのは、真実の法が曇っているからだ。自分の機を包んで法を眺めているのだから、実機の救われる時期はなく、無量永劫流転を続けなければならぬのだ。それを照らし出すのが、果遂の誓いの願功です。あれだけ素直に聞いていると自惚れていた善人が、いずれの行も及び難き身、聞いたも知ったもみな凡智の計らい、私は宿善がなかったのかと往生の望みが絶えた時が、出離の縁あることなし、地獄は一定住家ぞかすと0にさされたとときが自力がつきたので、言葉を離れたと同時に、仏智の不思議に貫かれたとき、そのときに信念冥合の機法一体、たのむ一念のとき、仏智が満入したとき、即得往生しているのだ。このときが第二十願の信境から第十八願の真髓を諦得した天地転倒の大慶喜を頂いたので、これを極悪最下の機類が極善最上の法に摂取されたと法然上人

は仰せられたのです。この凡智がつきて仏智に生かされた不思議の境地を諦得させられた人でなければ、方便から真実に転入したとはいえない。実地に求道して体験した人でなければ、真仮の分際はわからないから説けないのだ。

4 調機誘引

善導さまが、「過去已に曾て此法を修習し今重て聞くことを得て即ち歡喜を生ず」と仰せられてあるが、宗教を聞かしていただくのも一朝一夕ではなく、開發に至るまでには容易なことではありません。人間は顔容が違ふように、信仰の程度もみな違ふのです。自分ほどの程度にいるか比較してみても、徹底するまで求道してください。

- 1 ひとつとはなしに他力廻向の宗教を聞く身になった。
- 2 罪ありながら障りかかえながらお救いとは有り難い。
- 3 三毒の煩惱は往生の邪魔にならないとは勿体ない。